趣旨説明：ヨーロッパ前近代の複合国家

小野賢一

この研究報告書は、2018 年 10 月 13 日に愛知大学人文社会学研究所主催で開催された講演会「ヨーロッパ前近代の複合国家」の研究報告の成果物である。

本講演会は、2016 年 11 月 26 日に愛知大学人文社会学研究所主催で開催された「国境を超える歴史学」（報告者：村上司樹氏、服部良久氏、多田哲氏）及び 2017 年 11 月 25 日に同研究所主催で開催された講演会「帝国と魔女で読み解くヨーロッパ」（報告者：朝治啓三氏、田島篤史氏、高田京比子氏）の問題意識を継承しつつ、ヨーロッパ前近代の「複合国家」というキーワードを通じて、近代歴史学のナショナル・ヒストリーを乗り越え、21 世紀にふさわしい新しい歴史学のあり方について議論するものである。

中世近世のヨーロッパには、近代の英独仏の領域にほぼ重なるイングランド王国、神聖ローマ帝国、フランス王国が存在した。これらの国々と並び称される大国がブルゴーニュ公国である。ところでブルゴーニュ公国について世間一般では如何なるイメージが流布しているだろうか。

フランス史のなかでは、親王領としてあらわれ、王国のなかの国内政治の一派「ブルゴーニュ派」として断片的に事件史のなかに姿を見せる。特にオルレアン公暗殺事件とそれにつづくブルゴーニュ公暗殺事件という悲惨なエピソードはフランス史のなかの有名な王国の内紛のエピソードとして知られている。イングランド史のなかでは、ブルゴーニュ公国は、百年戦争期の外交上の駆け引きの相手としてあらわれる。歴史家アンリ・ピレンヌが一国史としてのベルギー史を構想した際に、現在のベルギーとほぼ重なる前近代のフランドル伯領を一時的に支配していた勢力としてブルゴーニュ公国を位置づけた。しかしながら、ピレンヌの関心はあくまでも近代国民国家ベルギーの方に向いていたといってよい。

このようにフランス史、イングランド史、ベルギー史のなかのエピソードとしてブルゴーニュ公国は断片的に姿を見せ、それらの断片をパズルのようにつないでようやくこのか

つての大国のイメージを形作るほかないのが現状である。現代の国民国家の領域と十分に重ならないため、近代以後に成立した国民国家の歴史編纂物のなかにパッチワークのようにはめこまれ、それらの一貫性のない断片をパズルのように組み合わせて世間一般に認知される国家、それがブルゴーニュ公国なのである。したがって専門家を除く世間一般ではブルゴーニュ公国の認知度は極めて低くならざるを得ない。

だが、国家としてのブルゴーニュは認知されなくとも、ブルゴーニュという言葉は、ヨーロッパ文化に関心を持つ人々に相当程度認知されているのではないだろうか。ブルゴーニュは、現在のフランスの一地方というだけでなく、ロマネコンティなどの高級ワインの産地として知られている。食通の間ではエスカルゴ（食用かたつむり）料理やブッフブルギニョン（牛肉の赤ワイン煮込み）やマスタード（西洋からし）は、ブルゴーニュの名物料理としてよく知られている。多くの人々が抱くブルゴーニュのイメージは、豪華な西洋料理と結びついている。このイメージは正しい。ブルゴーニュ公国の宮廷では高級品であったマスタードが宴会の際に湯水のごとく消費されていたという。この過剰なまでに豪華な宮廷文化にこそ近代国民国家の狭間に埋没してしまったが、かつてヨーロッパの大国として栄華を極めたブルゴーニュ公国を読み解く鍵がある。「複合国家」「パッチワーク的国家」またはスペクタクルや儀礼によって統治された「劇場国家」「典礼国家」などと表現され、近代のナショナル・ヒストリーでは読み解くことが難しいかつてのヨーロッパの大国ブルゴーニュ公国について、この分野の権威の放送大学教授の河原温先生にご教示いただく。

このシンポジウムの先駆的な点は、かなり無謀な試みであるかもしれないが、このブルゴーニュ公国とハプスブルク君主国を比較してみる点にある。ハプスブルク君主国は、複合国家でありながら、近代まで生き残った。現代のオーストリアやハンガリーを領域の内部に含んでいたが、この国家も近代のナショナル・ヒストリーの枠組みで捉えることはできない。学校教育（公教育）は、近代の国民国家の国民を作り上げるうえで不可欠な要素である。複合国家での学校教育が如何に行われており、それが如何なる位置づけを持っていたのかという点については、不明な点が多い。というのも複合国家を考察の対象とする場合、従来の一国史観に基づく教育制度史の枠組みのなかに収まりきらない盲点が含まれているからである。幸いなことにこの分野の第一人者の帯広畜産大学の佐々木洋子先生を

遠方からお招きすることができた。先生の実証研究に基づく、最新の研究の成果をご報告いただく。

コメンテーターとしてブルゴーニュやハプスブルクよりも小さいながらも、神聖ローマ帝国領内の領邦として歴史に大きな足跡を残した領邦国家ヴェルフェンの専門家の郡山女子大学短期大学部の桑野聡先生にご登壇いただき、このまたとない機会に桑野先生の御専門のヴェルフェン史にかかわる具体的な事例を通じて、全体の議論を総括していただく。

先生方の御専門のヴェルフェン公国、ブルゴーニュ公国、ハプスブルク君主国は、いずれもゲルマン民族大移動期にブルグント人が入植した地域に所領を持っていた国家であり、それらの諸国家の「家門政策」「宮廷と都市の儀礼」「学校教育（公教育）」と段階的に統治システムが発展してゆく様子が見事に展望できる機会となったのは、企画段階からの先生方の積極的なご助言とご配慮の賜物である。本ワークショップは、ナショナル・ヒストリーを超克し、21 世紀にふさわしい新しい歴史学を実践する試みである。